平成 21 年度全国学力･学習状況調査
第一次報告

この調査は、競争を目的とするものでなく、すべての子どもたちの学力や学習状況を把握し分析することにより、教育及び教育政策の成果と課題を検証し、その改善を図ることを目的としています。この調査により測定できる学力は特定の一部であり、学校の教育活動の一側面を示すものです。

調査結果の公表については、「過度の競争や序列化を招く」「市民と情報を共有すべき」など賛否両論がありますが、高石市教育委員会では、調査結果を公表することによって、学校・家庭・地域住民が共通の認識を持ち、高石の教育を見直す一つの機会にしたいと考えております。従いまして、調査結果について、昨年度に引き続き、科目ごとの平均正答率・分析結果・今後の改善の方策などを併せて情報提供していきます。

今回の第一次報告では、「科目ごとの平均正答率」、「この調査結果から見えてきた課題」等を公表いたします。なお、第二次報告として「生活習慣や学習意欲の質問紙調査結果の分析や課題」、「学力向上等の対策」を今後、示していきます。

高石市教育委員会

平成２１年度全国学力・学習状況調査　学力調査の結果概要　―平成21年4月21日実施―

調査の概要

(1) 調査の目的

ア　国が、全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、各地域における児童生徒の学力・学習状況をきめ細かく把握・分析することにより、教育及び教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

イ　各教育委員会、学校等が全国的な状況との関係において自らの教育及び教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

ウ　各学校が、各児童生徒の学力や学習状況調査を把握し、児童生徒への教育指導や学習状況の改善等に役立てる。

(2) 調査内容

Ⅰ…教科に関する調査

小学校：　**国語Ａ・算数Ａ**（主として「知識」に関する問題）　**国語Ｂ・算数Ｂ**（主として「活用」に関する問題）

中学校：　**国語Ａ・数学Ａ**（主として「知識」に関する問題）　**国語Ｂ・数学Ｂ**（主として「活用」に関する問題）

Ⅱ…質問紙に関する調査

児童生徒対象・学校対象

(3) 調査対象

小学校第６学年（高石市：７校　児童数：570 人）　**中学校第３学年**（高石市：３校　生徒数：470 人）

(4) 調査実施日

平成 21 年４月 21 日（火）

(5) 調査結果の取扱いについて

○　本調査は、競争を目的とするものではなく、すべての子どもたちの学力や学習状況を把握し分析することにより、教育及び教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図ることを目的としている。

○　本調査により測定できる学力は**特定の一部であり、学校における教育活動の一側面を示すもの**である。

平成21年度　本市の校種・教科・区分別正答率

小学校		平均正答率		
		高石市（公立）	大阪府（公立）	全国（公立）
国語	Ａ区分	69.2	68.3	69.9
	Ｂ区分	50.5	49.4	50.5
算数	Ａ区分	79.6	78.4	78.7
	Ｂ区分	55.4	53.8	54.8

中学校		平均正答率		
		高石市（公立）	大阪府（公立）	全国（公立）
国語	Ａ区分	73.2	72.7	77.0
	Ｂ区分	67.7	68.3	74.5
数学	Ａ区分	61.5	59.9	62.7
	Ｂ区分	53.8	52.5	56.9

上表の本市平均正答率の数値データは、市内の全小学校・全中学校のデータに基づいて表しています

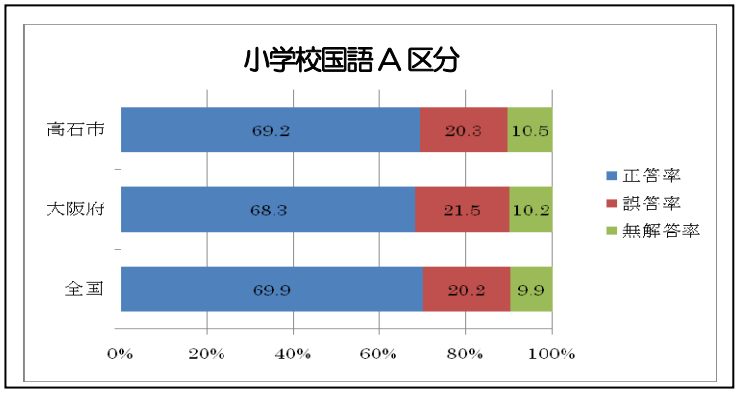
平均正答率からわかる本市小・中学校別結果の概要について

◇小学校Ａ区分（主として「知識」に関する問題）については、国語が全国平均をわずかに下回るものの、大阪府平均を上回る結果が出ています。算数は大阪府平均、全国平均をともに上回る結果が出ています。Ｂ区分（主として「活用」に関する問題）については、国語が全国平均と同程度、算数では上回る結果となっています。

◇中学校Ａ区分については、国語・数学ともに全国平均を下回るものの、大阪府の平均を上回っています。Ｂ区分については、国語は全国平均、大阪府平均を下回っていますが、数学については大阪府平均を上回る結果となっています。

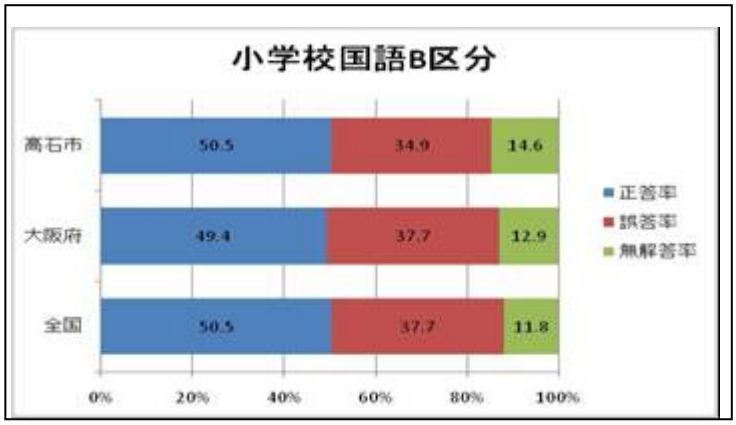
各教科に関する調査結果（高石市）の概要　【小学校】

小学校国語　結果から見えてくる課題



Ａ区分問題（主として「知識」に関すること）

◆大阪府の平均正答率が68．3%であるのに対し、高石市は69.2%であり、0.9ポイント上回った。
◆全国の平均正答率が 69．9%であるのに対し、高石市は0.7ポイント下回った。
◆全国との差は、平成20年度が1.6ポイントであり、昨年と比較すると全国の状況との差は縮まる傾向にある。
◆誤答率、無解答率においても、それぞれ全国の状況との間に有意な差は見られない。



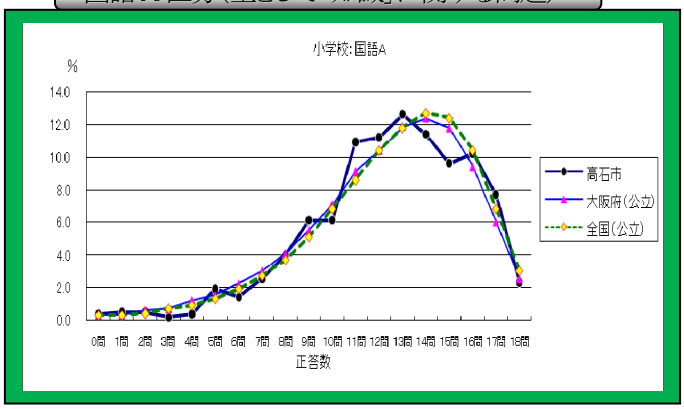
Ｂ区分問題（主として「活用」に関すること）

◆大阪府の平均正答率が49.4%であるのに対し、高石市は50.5%であり、1.1ポイント上回った。
◆正答率50.5%は全国の平均正答率と同じである。
◆全国との差は平成20年度が2.7ポイントであり、昨年と比較すると全国の状況との差は縮まっている。
◆誤答率、無回答率については、全国・大阪府に比較して、高い割合となっている。

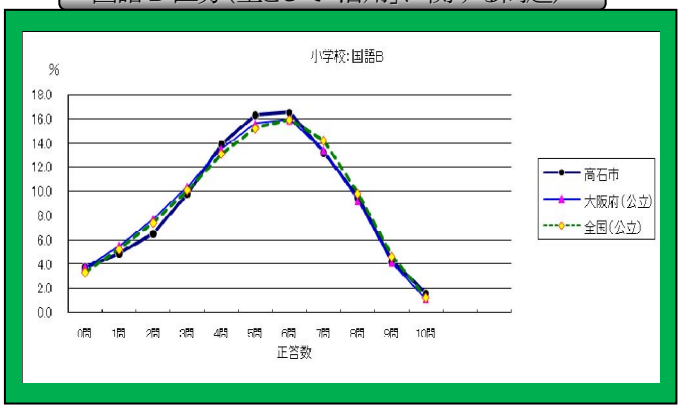
◆正答数の分布については、下のグラフ①《緑枠》より、ピークはわずかに左よりであるものの、ほぼ全国・大阪府と同じ傾向であることがわかります。また、国語Ｂ区分問題（主として「活用」に関する問題）において、全問正答率は全国を上回っています。
◆領域別にみると、次ページのグラフ②《黄色枠》より、特に「言語」についての知識・理解については全国を上回る結果になっています。また、問題形式別では、短答式の問題についても大阪府を上回っています。しかし、Ａ区分（主として「知識」に関する問題）では、「話すこと・聞くこと」の分野において、また、記述式の問題形式において、課題のあることが分かります。また、Ｂ区分（主として「活用」に関する問題）では、全国・大阪府と同様に「書く」ことの分野においての課題があることが分かります。

グラフ①

国語Ａ区分（主として「知識」に関する問題）

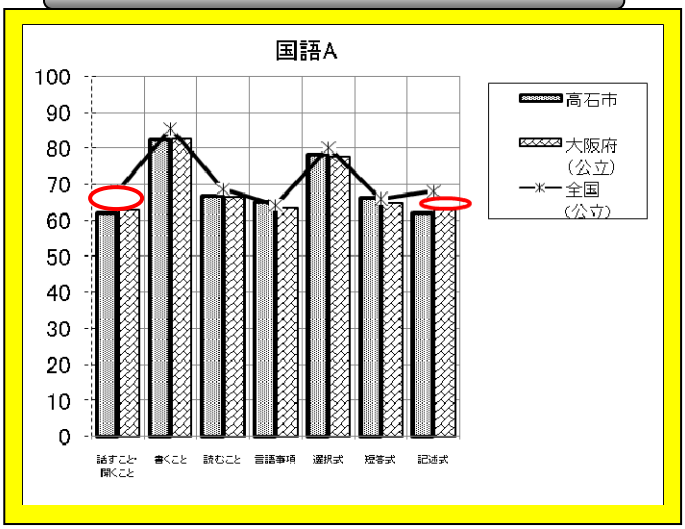


国語Ｂ区分（主として「活用」に関する問題）

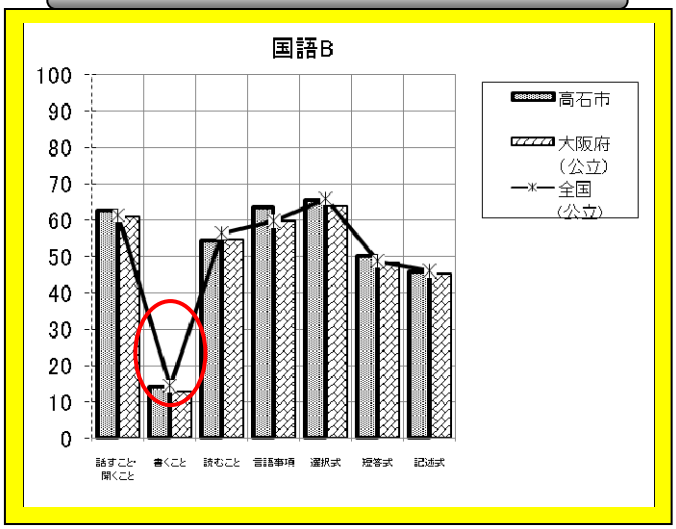


グラフ②

国語Ａ区分（主として「知識」に関する問題）



国語Ｂ区分（主として「活用」に関する問題）



Ａ区分に見られる課題等について

◆Ａ区分（主として「知識」に関する問題）では、「言語事項」の領域、問題形式では漢字を読む・書く等の短答式の問題で全体的に高い正答率となってはいますが、「賛成」などのように『心の動きに関する漢字』に対する無解答率が高くなっています。また、ローマ字については全国・大阪府と同様正答率が低くなっています。全国的に正答率が低かった「１文を接続語を使って２文に分ける」という問題は正答率はやや高いものの無解答率が高くなっています。

◆毛筆の下書きについて文字の配列を問われたり、話合いの司会の進め方について問われたりする「教えられていないこと」についての問題では、正答率はほぼ全国・大阪府と同様であるものの、無解答率は大変高くなっています。

◆「話すこと・聞くこと」の領域、また問題形式としては記述式において正答率が全国に比べて低くなっており、依然課題があることがわかります。

Ｂ区分に見られる課題等について

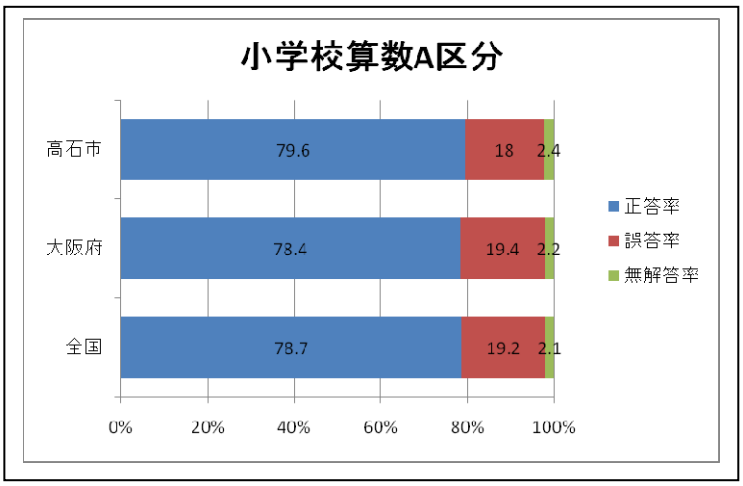
◆Ｂ区分（主として「活用」に関する問題）の正答率分布グラフはほぼ、全国・大阪府と同じ６問を頂点とする山型を描いていますが、全問正答率は全国・大阪府を上回っています。

◆Ｂ区分において、問題形式が短答式、記述式のいずれも「書くこと」「読むこと」の領域で正答率は高くなっているものの、無解答率については、全国・大阪府に比較して高い割合になっています。

◆Ｂ区分の平均正答率を見る限りでは正答率は高いが、全体的に無解答率が高い傾向にあります。よく理解できている子どもと、理解が不十分な子どもに分かれていることがうかがえます。

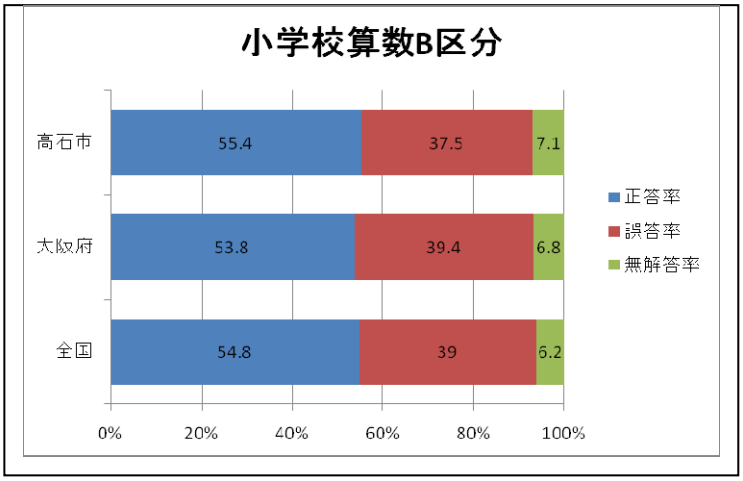
◆Ａ区分では課題が見られた記述式の問題ですが、Ｂ区分では「作戦カード」をもとにしてチームの攻め方を説明する記述式の問題については、結果として、正答率で全国・大阪府を上回る結果となっています。

小学校算数　結果から見えてくる課題



A 区分問題（主として「知識」に関すること）

◆大阪府の平均正答率が 78.4%であるのに対し、高石市は 79.6%であり、1.2 ポイント上回った。
◆全国の平均正答率が 78.7%であるのに対し、高石市は 0.9 ポイント上回った。
◆全国との差は、平成 20 年度がマイナス 0.4 ポイントであったのに対し、昨年と比較すると正答率を大きく伸ばしている。
◆誤答率については、全国・大阪府を下回るが、無解答率についてはわずかに上回った。



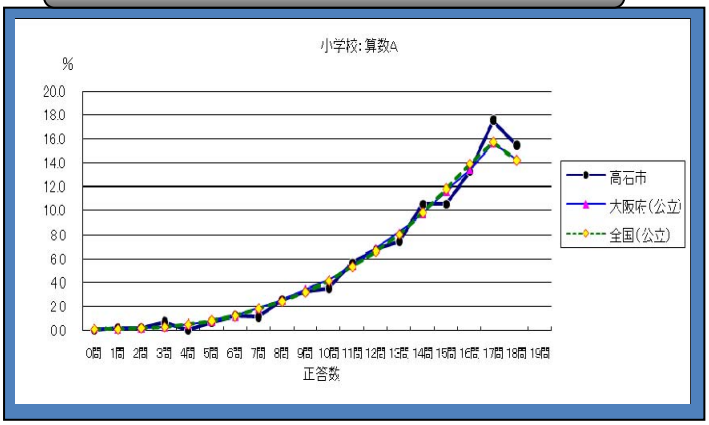
B 区分問題（主として「活用」に関すること）

◆大阪府の平均正答率が 53.8%であるに対し、高石市は 55.4%であり、1.6 ポイント上回った。
◆全国の平均正答率が 54.8%であるのに対し、高石市は 0.6 ポイント上回った。
◆全国との差は、平成 20 年度がマイナス 1.8 ポイントであったのに比較すると正答率を大きく伸ばしている。
◆B 区分でも、誤答率は全国・大阪府をともに下回るものの無解答率については上回っている。

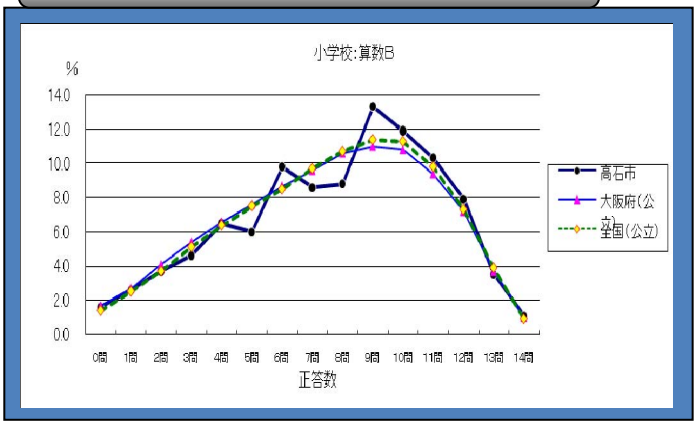
◆正答数の分布については、下のグラフ③《青枠》より、ほぼ全国・大阪府と同様の山型を描いていることが分かります。特に A 区分（主として「知識」に関する問題）では、17 問・18 問の正答数が全国・大阪府を上回っています。
◆A 区分の領域別では、次のページのグラフ④《橙枠》より、「数と計算」「量と測定」「数量関係」の問題について、正答率が高く、全国・大阪府を上回っています。問題形式では、短答式で正答率が高くなっています。B 区分でも「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の 4 つの領域すべてについて、全国・大阪府を上回っていることがわかります。

グラフ③

算数 A 区分（主として「知識」に関する問題）

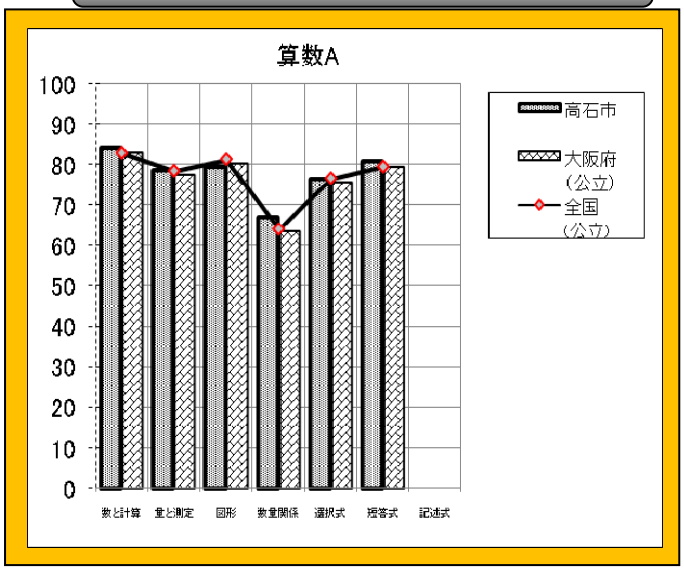


算数 B 区分（主として「活用」に関する問題）

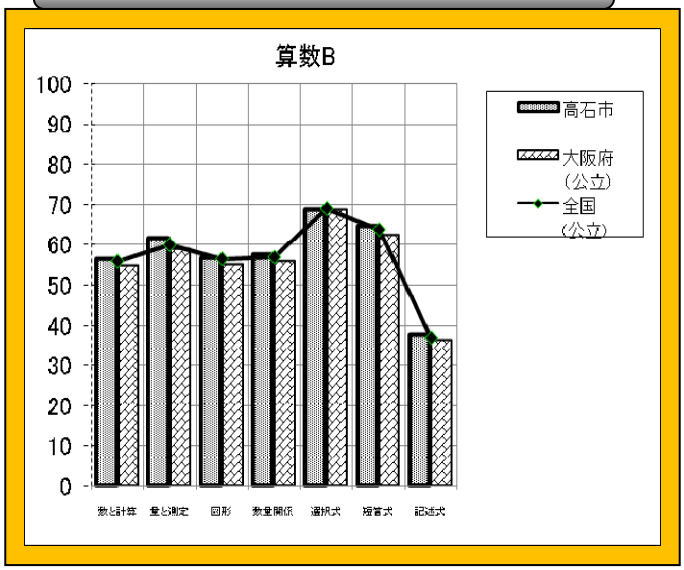


グラフ④

算数 A 区分（主として「知識」に関する問題）



算数 B 区分（主として「活用」に関する問題）



A 区分に見られる課題等について

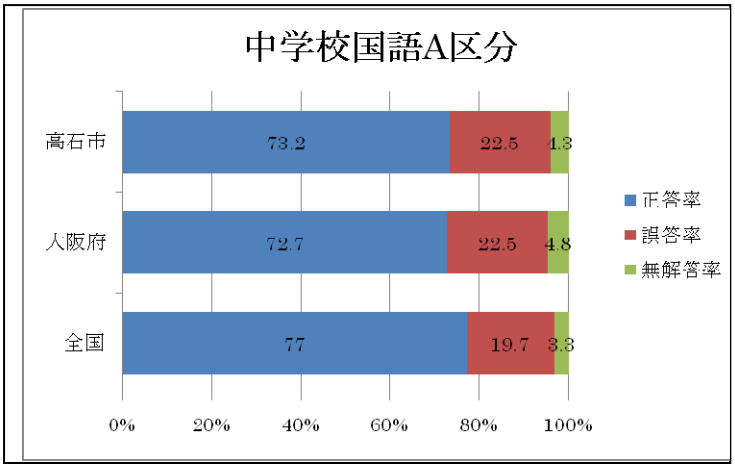
◆全問正答率については、全国・大阪府を上回っており、全体としては良い結果となっていますが、全体的に無解答率が高い傾向にあります。
◆大阪府が『課題』とした、「図形」の問題（①四角形の４つの角の大きさを理解しているか　②長方形や直角三角形の定義や性質について理解しているか　③平行四辺形の向かい合う辺の長さが等しいという性質を理解しているか）については、正答率は全国・大阪府とほぼ同様のものの、無解答率がやや高くなっています。中でも平行四辺形の角の大きさを求める問題では無解答率が、全国・大阪府を２ポイント上回っています。資料を２つの観点から分類整理し、表を用いて表す問題（領域「数量関係」）では、正答率が高い反面、無解答率もやや高く、理解が十分である児童と、十分でない児童に分かれていることがわかります。

B 区分に見られる課題等について

◆ほぼ、全国・大阪府と同様の傾向ですが、「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」すべての領域でやや、全国・大阪府を上回っています。問題形式別に見ても同様です。しかし、全体的に見て、無解答率が高くなっています。
◆領域別に詳しく見ると、「図形」の性質について、やや無解答率が高くなっています。また、「量と測定」の領域では、表やグラフから必要な情報を取り出して答える問題でもその傾向が見られます。
◆大阪府が『課題』とした、「示された板にカードを敷き詰めることができないと判断するための方法を数学的に表現する」という「数学的な考え方」及び「記述式」の問題では、無解答率はやや高いものの、正答率も高くなっています。また、「基準量と比較量を基にして割合の大小を判断し記述する問題」では無解答率はやや低く、正答率はやや高いとの結果がでています。難しい問題にあたって、解答を記述しようする姿勢で取り組んだ様子がうかがえます。一方で、記述式になると無解答率が高くなる傾向は依然見られます。

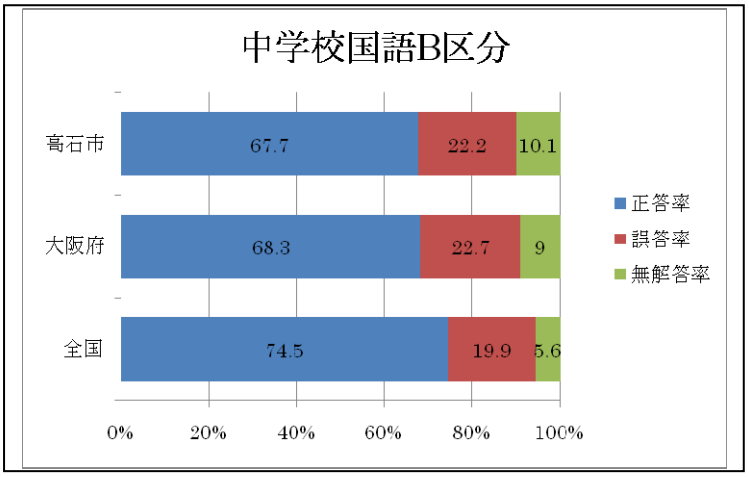
各教科に関する調査結果（高石市）の概要　【中学校】

中学校国語　結果から見えてくる課題



A 区分問題（主として「知識」に関すること）

◆大阪府の平均正答率が 72.7%であるのに対し、高石市は 73.2%であり、0.5 ポイント上回った。
◆全国の平均正答率が 77%であるのに対し、高石市は 3.8 ポイント下回った。
◆全国との差は、平成 20 年度が 4 ポイントであり、昨年と比較すると全国の状況との差は縮まる傾向にある。
◆誤答率、無解答率においても、それぞれ大阪府の状況との間に有意な差は見られない。



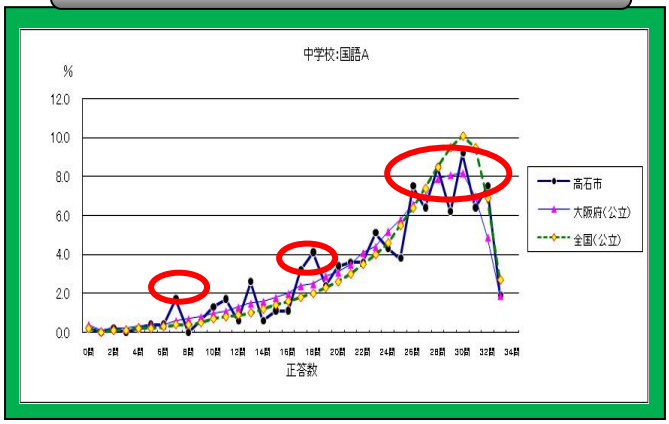
B 区分問題（主として「活用」に関すること）

◆大阪府の平均正答率が68.3%であるのに対し、高石市は 67.7%であり、0.6 ポイント下回った。
◆全国の平均正答率が 74.5%であるのに対し、高石市は 6.8 ポイント下回った。
◆全国との差は平成 20 年度が 6.7 ポイントであり、今年度も同様の傾向が見られる。
◆無回答率については、高い割合となっており、全国と比較すると 2 倍近くなっている。

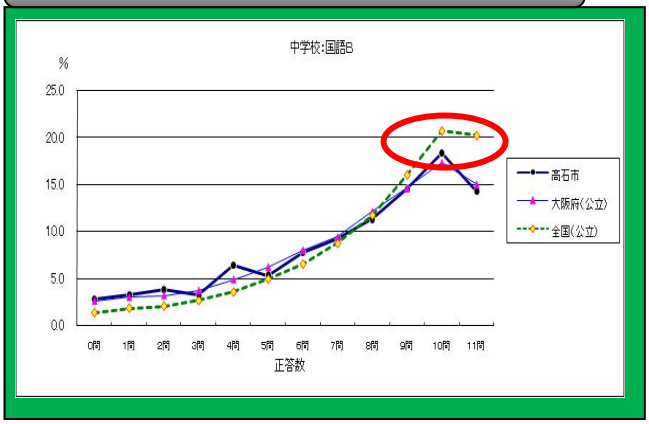
◆正答数の分布については、下のグラフ⑤《緑枠》より、ほぼ全国・大阪府と同じ傾向が見られるものの、特に A 区分では３箇所程度のピークのある複雑な折れ線を描いています。B 区分の正答率では、ほぼ大阪府と同様であるものの、高位層において全国との差が大きくなっています。
◆また、低位層においては全国・大阪府を上回る傾向にあります。次ページのグラフ⑥《黄色枠》より、全体として無解答率が高く、「書くこと」の領域、「記述式」では特に課題が大きいことがわかります。

グラフ⑤

国語 A 区分（主として「知識」に関する問題）

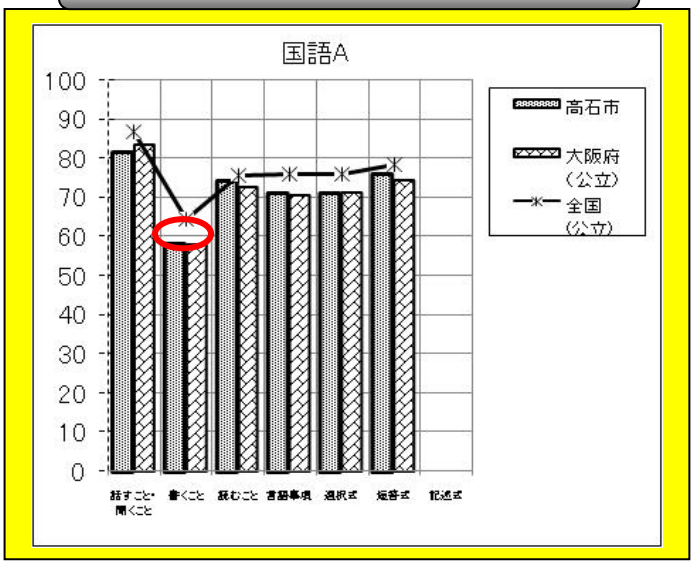


国語 B 区分（主として「活用」に関する問題）

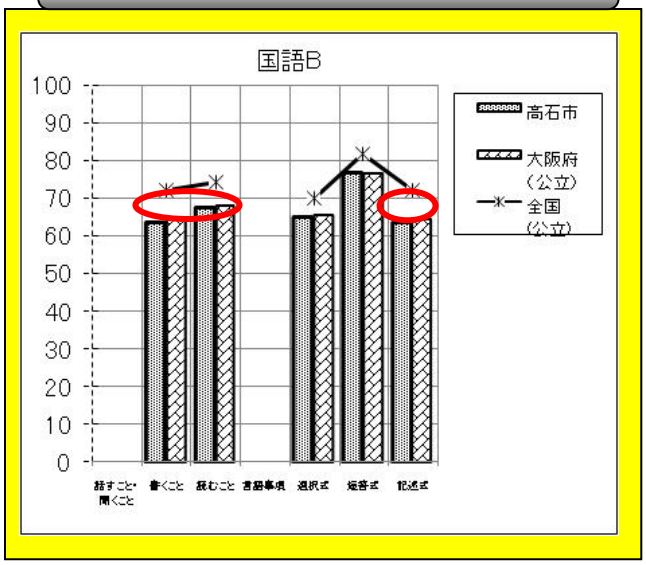


グラフ⑥

国語 A 区分（主として「知識」に関する問題）



国語 B 区分（主として「活用」に関する問題）



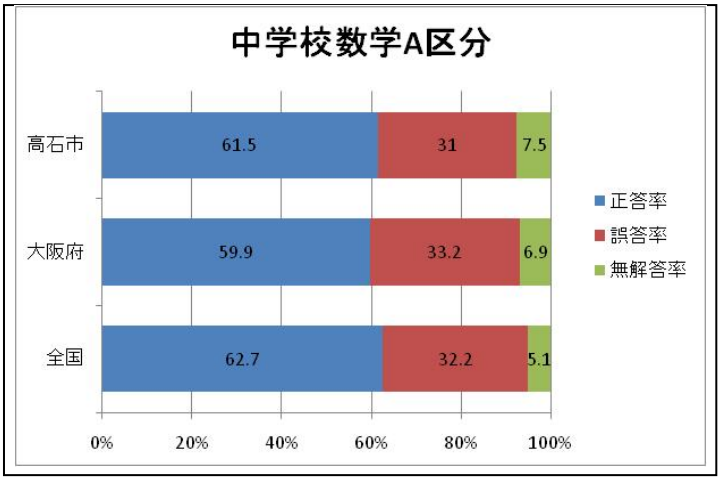
A 区分に見られる課題等について

◆「主語（主部）に合わせて述語（述部）の部分を正しく書く」では、大阪府全体として課題があるとしていますが本市でも同様になっています。
◆大阪府が課題とした「短歌の形式について」問われた問題については、全国・大阪府を上回る正答率となったものもあります。本市の子どもたちが短歌などに親しむ機会が多くあったことを示しています。
◆漢字の読み・書きについては、正答率も大阪府をやや上回るか全国並みであり、無解答率も大阪府並みとなっていますが、送り仮名を伴う『補う』という漢字については大阪府同様無解答率がやや高くなっています。
◆昨年度からの課題である無解答率については、全体を通じて、全国・大阪府より高い傾向が依然続いています。

B 区分に見られる課題等について

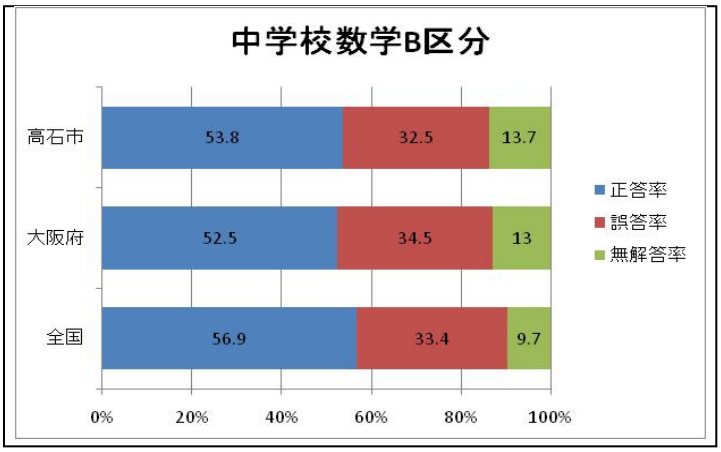
◆B 区分では、「与えられた資料から必要な情報を取り出す問題」について、全体的に課題があります。「内容をとらえてさらにそれを箇条書きで３つにまとめる」「文章と補助資料との関わりを理解する」「表現上の特徴をとらえる」等の問題では、いずれも無解答率が全国の 1.5～2 倍近くになっています。これは、同じ傾向の大阪府とくらべてもやや高くなっており、今後引き続き取り組んでいくべき、本市の課題となっています。
◆「記述式」の問題では特に無解答率が高い傾向が強くなります。「書くこと」の活動について今後さらに取り組んでいく必要があります。

中学校数学　結果から見えてくる課題



A 区分問題（主として「知識」に関すること）

◆大阪府の平均正答率が 59.9%であるのに対し、高石市は 61.5%であり、1.6 ポイント上回った。
◆全国の平均正答率が 62.7%であるのに対し、高石市は 1.2 ポイント下回った。
◆全国との差は、平成 20 年度が 0.3 ポイントであり、昨年と比較すると全国の状況との差はやや開いている。
◆無解答率については、全国を 2 ポイント以上上回っており、依然課題となっている。



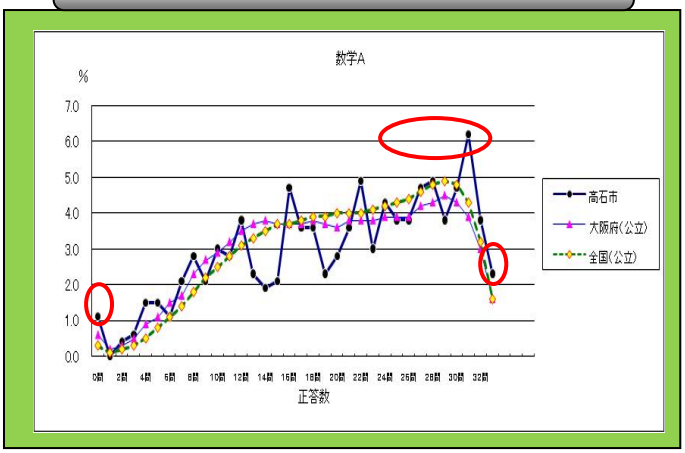
B 区分問題（主として「活用」に関すること）

◆大阪府の平均正答率が52.5%であるのに対し、高石市は 53.8%であり、1.3 ポイント上回った。
◆全国の平均正答率が 56.9%であるのに対し、高石市は 3.1 ポイント下回った。
◆全国との差は平成 20 年度が 8.6 ポイントであり、昨年と比較すると全国の状況との差は縮まっている。
◆無回答率については、全国に比較して高い割合となっており依然課題である。

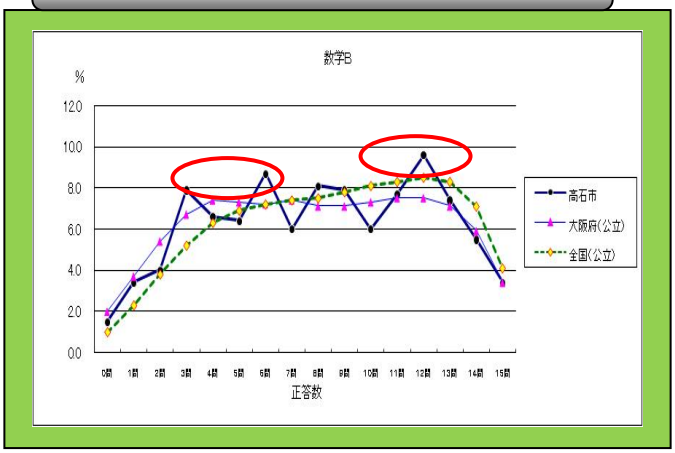
◆下のグラフ⑦《薄緑枠》より、A 区分では正答数０問の割合が全国・大阪府と比較しても高くなっていることが分かります。また、正答数の分布については、A 区分・B 区分とも大阪府がなだらかなふたこぶの曲線を描いているのに対し、本市では大変複雑な折れ線を描いており正答率が拡散しています。ただし、高位層については全国・大阪府よりポイントが高くなっています。
◆領域別にみると、次ページのグラフ⑧《桃色枠》より、どの領域・問題形式でも大阪府と比較して平均正答率が高くなっています。A 区分・B 区分ともに、全国・大阪府同様「数量関係」の領域で、また、問題形式では「記述式」に課題があることが分かります。

グラフ⑦

数学 A 区分（主として「知識」に関する問題）

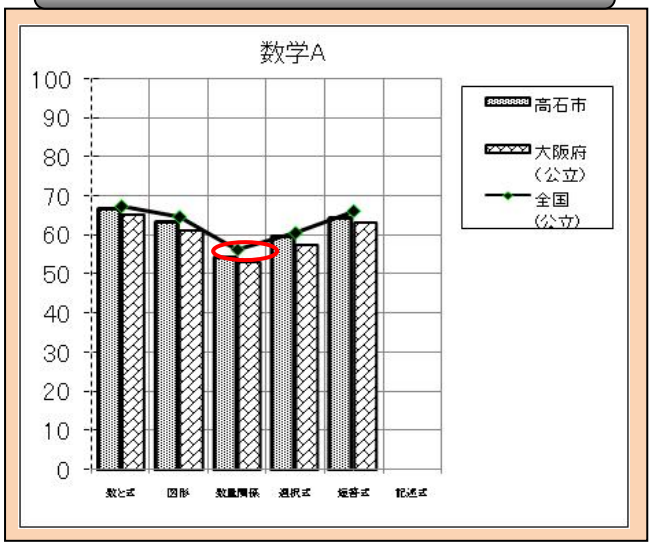


数学 B 区分（主として「活用」に関する問題）

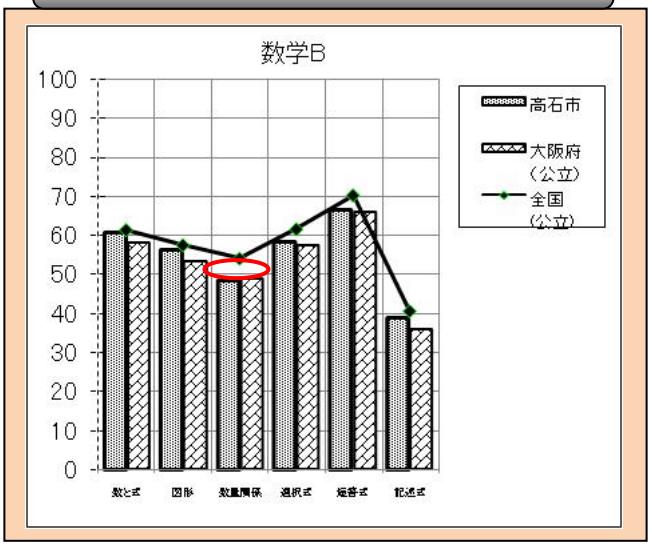


グラフ⑧

数学Ａ区分（主として「知識」に関する問題）



数学Ｂ区分（主として「活用」に関する問題）



Ａ区分に見られる課題等について

◆領域別にみると、Ａ区分では、「数と式」「図形」「数量関係」すべての領域において、また「選択式」「短答式」の問題形式どちらも、大阪府を上回ります。
◆問題別にみると、「比の意味」や「（　）を含む正の数と負の数の計算」、また『３ｘ×（－４ｘｙ）』のような「単項式どうしの乗法の計算」などの「数と式」領域において、やや正答率に課題があります。「図形の角（同位角、三角形の内角の和）」について問われた「選択式」の問題では正答率は高くなっていますが、無回答率でも全国・大阪府を上回っています。また、全国・大阪府では平均正答率に課題があった「反比例」の問題や「二元一次方程式」の解についての問題でも同様の傾向があります。理解の進んでいる子どもと、そうでない子どもに分かれていることがわかります。
◆「数量関係」の問題では全体的に無解答率が高い割合になっています。

Ｂ区分に見られる課題等について

◆領域別では、Ｂ区分でも大阪府を全体として上回っていますが、無解答率の高さが目立ちます。
◆問題別にみると、正答率が全国を上回るものもあり、無解答率と併せて考えると理解についての二極化の傾向が見られます。
◆「事象を数学的に解釈し筋道立てて説明する」表やグラフから読み取る問題では、やや正答率に課題が見られ、無解答率も高くなっています。大阪府が最も課題とした、「蛍光灯と白熱電球の総費用について２つの総費用が等しくなるおよその時間を求める方法を説明する」問題については、無解答率が６割を超えており、本市においてもやはり課題であることがわかります。
◆Ｂ 区分の出題の傾向としては、『答え』を求めるよりも、『その答えが導き出される根拠や、答えの意味を説明する』といった問いが多くなっています。「図形の性質を利用して証明する」「３ つの箱のうち当たりが出るゲームにおいてどのように予想すれば当たる箱を選ぶことができるかを説明する」問題については、正答率に課題があるとともに無解答率は高くなっています。考え方の筋道を立てて答えを導き出す経験をさらに積み重ねていく必要があります。